

# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

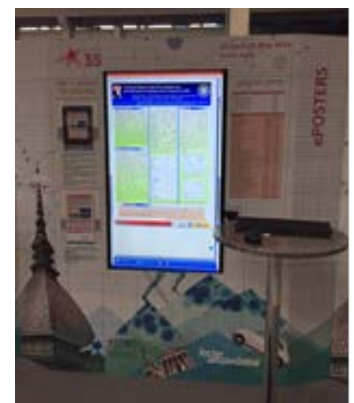
## ◆第 1 次 No.1

【所 属】	医学研究科 修士課程 2 年
【氏 名】	大矢 奈穂子
【学会の名称】	2 <sup>nd</sup> International Conference on Human Biomonitoring, Berlin 2016 (第 2 回 国際生物学的モニタリング会議)
【研究発表報告】	<p>ドイツのベルリンで開催された第2回国際生物学的モニタリング会議に4月17日から19日まで参加してきました。本学会はドイツの環境省及び環境庁によって開催されたもので、世界中の生物学的モニタリング分野の専門家が集いました。私は、Existing and emerging HBM programs のトピックスにおいて、「1 歳半児の使い捨てオムツから抽出した尿中の有機リン系殺虫剤代謝物濃度の測定」についてのポスター発表を行いました。海外の研究者の方から質問や意見をいただく中で、思うようにコミュニケーションがとれず、悔しい思いをすることがしばしばありました。今後、国内外で活躍できる研究者になるためには語学力も欠かせないということに気づかされました。しかし、自分の研究内容に多くの方が興味を持っていただき、自分が世界に通用するような研究を行っているという実感も持つことができました。実際、本学会の特集を組む International Journal of Hygiene and Environmental Health の special issue の招待論文として選ばれました。自分にとってこれが初めての学会であり、大変刺激的な経験となりました。今回の学会で経験したこと、学んだことを今後の研究に大いにいかしていきたいと思っています。</p>



## ◆第 1 次 No.2

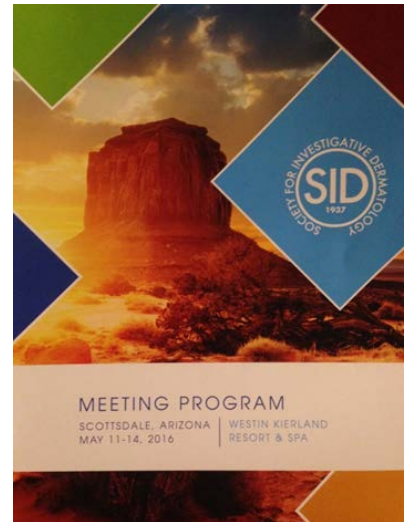
【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	近藤 拓人
【学会の名称】	European Society for Radiotherapy & Oncology 35 (ヨーロッパ放射線腫瘍学会 35)
【研究発表報告】	<p>European Society for Radiotherapy &amp; Oncology 35 (ヨーロッパ放射線腫瘍学会 35)にて Concurrent high-dose (60-70 Gy) radiation and chemotherapy for esophageal cancer: long-term result (食道癌に対する高線量放射線治療+化学療法の治療成績) という演題名で発表させていただいた。日本と欧米では食道癌の発生部位、組織、治療戦略が異なり、今回、当院で行っている高線量の放射線治療+化学療法の成績を報告した。欧州との違い等を含め様々な意見交換ができ、大変有意義であった。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

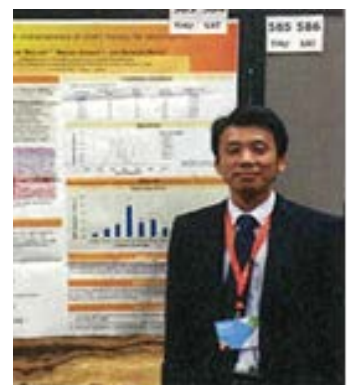
## ◆第 1 次 No.3

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	井汲 今日子
【学会の名称】	Society for Investigative Dermatology 75 <sup>th</sup> Annual Meeting (米国研究皮膚科学会第 75 回年次会議)
【研究発表報告】	<p>この度は米国研究皮膚科学会参加という貴重な機会をいただきまして誠にありがとうございます。</p> <p>今回私は乾癬性関節炎と頸椎病変についてポスター発表を行い、乾癬性関節炎と他の血清反応陰性関節炎の鑑別方法などの質問を受けました。本学会は世界中のトップレベルの研究者が集うもので、とても刺激的で、今後の研究意欲をかきたてられました。</p> <p>ポスターセッションでない時間帯にポスターを見に行ってもディスカッションが繰り広げられていたり、朝早くから活発な議論がなされる講演があったり、皆真剣で白熱した学会でした。また、他のプレゼンターのポスターを見ることはとても学ぶことが多かったです。講演内容だけでなく、Figure の書き方、ポスターのまとめ方、学会に臨む姿勢など、今後参考にしたい内容が豊富でした。</p> <p>このような機会をいただき本当に感謝しております。臨床・研究ともに努力してまいります。</p>



## ◆第 1 次 No.4

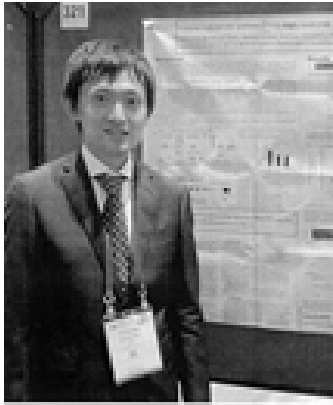
【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	益田 秀之
【学会の名称】	Society for Investigative Dermatology 75 <sup>th</sup> Annual Meeting (米国研究皮膚科学会 5 回年次会議)
【研究発表報告】	<p>Scottsdale/Arizona にて開催されました SID (米国研究皮膚科学会) に参加して参りました。本学会は、文字通り皮膚科分野の研究に関する学会で、私の発表内容は光を用いた皮膚治療に関するものでした。質疑応答や関連する研究発表等に関するディスカッション等を通し、非常に有益な経験をすることができました。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

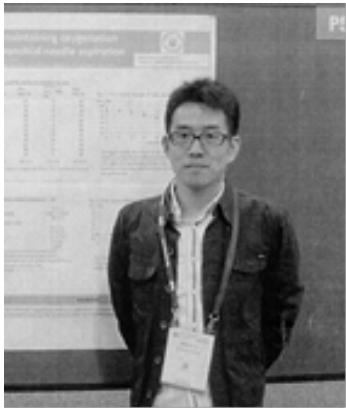
## ◆第 1 次 No.5

【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	福田 悟史
【学会の名称】	American Thoracic Society (米国胸部学会会議)
【研究発表報告】	<p>今回の発表に際し、各国の専門家から多数の意見や提案を頂きました。中でも特に、統計の解析においてベバシズマブ投与群の解析についての意見は本研究において今後の方向性が明確になりました。この様に本研究の今後の課題や方向性を確認する上で非常に有意義な機会でした。</p>



## ◆第 1 次 No.6

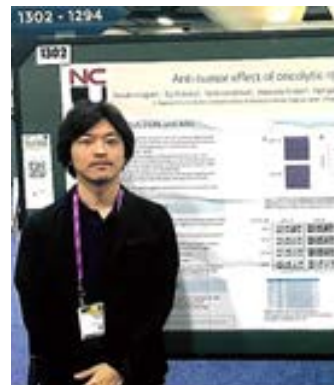
【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	市川 博也
【学会の名称】	American Thoracic Society (米国胸部学会)
【研究発表報告】	<p>American Thoracic Society (米国胸部学会)は呼吸器領域で世界的に権威のある学会であり、各国から高名な研究者、臨床医が集まる学会です。今回の発表は当研究室で取り組んできた気管支鏡について発表しました。他国の研究者と交流して様々な意見をいただき刺激を受けました。今後の研究に生かしていきたいです。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

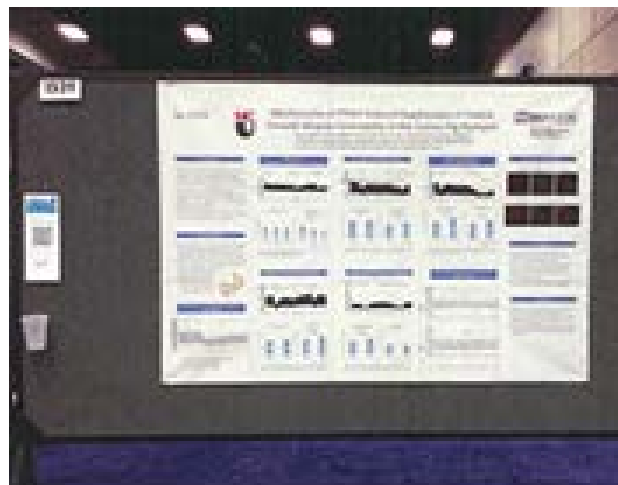
## ◆第 1 次 No.7

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	稲垣 佑祐
学会の名	DDW 2016 (消化器病週間)
【研究発表報告】	<p>2016 年 5 月にアメリカのサンディエゴで開催された DDW に参加をしてきた。消化管関連の複数の学会が合同で行われる規模の大きな学会であり、世界中から多くの参加者が訪れ、新たな知見などについて発表や議論が行われており、自分も刺激を受け勉強することができた。ポスターで「GIST に対する腫瘍崩壊ウイルスであるレオウイルスの効果」を発表した。質問もありディスカッションすることができ、今後の研究に活かすことができそうで有意義なものとなった。</p>



## ◆第 1 次 No.8

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	大口 英臣
【学会の名称】	Digestive Disease Week 2016 (2016 米国消化器病学会)
【研究発表報告】	<p>他の研究者からの質問や議論を期待していたが、思いの外研究歴の長い人物から、アドバイスを受ける事が出来た。世界では想像もつかない程進んだ研究をしている機関が沢山有り、今後 更に自身の研究を進めていく精神的原動力になった。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ◆第 1 次 No.9

【所 属】 医学研究科 博士課程 4 年

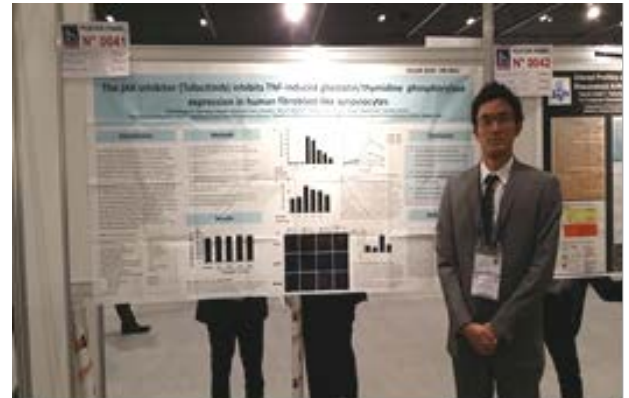
【氏 名】 川口 洋平

【学会の名称】

Annual European Congress of Rheumatology ( EULAR : 欧州リウマチ学会)

【研究発表報告】

2016 年 6 月 7 日から 6 月 11 日まで行われた Annual European Congress of Rheumatology ( EULAR : 欧州リウマチ学会) に参加させて頂きました。基礎研究に関わる上で海外の最新の知見を得ることが出来たのは、今後の臨床、研究を行うにあたり、自分の財産となりました。



## ◆第 1 次 No.10

【所 属】 医学研究科 博士課程 4 年

【氏 名】 八木 崇志

【学会の名称】

The American Diabetes Association's 76<sup>th</sup> scientific sessions

【研究発表報告】

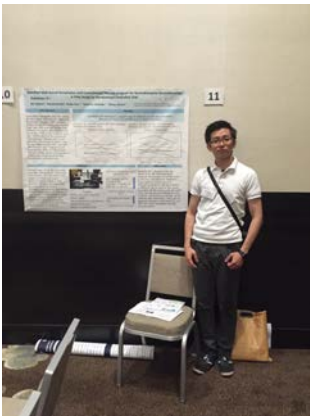
糖尿病患者において近年癌との関連が注目を集めている。今回の発表ではその原因の一つとして糖尿病患者における高いグルカゴン血症がかかわっている可能性について基礎的研究を報告した。海外の学会でポスター発表を行い多くの研究者とディスカッションすることができ有意義であった。



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

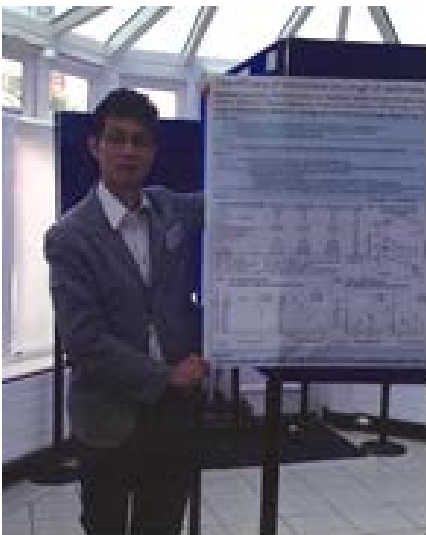
## ◆第 1 次 No.11

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	伊井 俊貴
【学会の名称】	Association for Contextual Behavioral Science world conference13 (第 14 回文脈的行動科学協会世界会議)
【研究発表報告】	<p>2015 年 6 月 14 日から 6 月 16 日にかけて、Association for Contextual Behavioral Science world conference14 がアメリカのシアトルで開催された。今回のテーマは Reach ということで世界各国や様々な職種へ ACT を広げる方法が議論された。本学会において現在無作為割り付け比較試験を行っている、ベンゾジアゼピン中止のためのパイロットスタディーのポスター発表を行った。本学会で得た、他の研究者とのつながりや、議論を今後の研究に生かしていきたい。</p>




## ◆第 1 次 No.12

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	福光 研介
【学会の名称】	9th London International Cough Symposium 2016 (第 9 回ロンドン国際咳シンポジウム 2016)
【研究発表報告】	<p>この度、2016 年 6 月 29 日～7 月 1 日に開催された 9th London International Cough Symposium 2016 (第 9 回国際咳シンポジウム) に参加させていただきました。本学会のテーマは慢性咳嗽であり、本会には咳嗽の専門家が世界中から集うため、慢性咳嗽の病態生理や治療に関する最新の講演を拝聴することができました。</p> <p>本学会にはポスターセッションが設けられており、幸いにも「The efficacy of tiotropium on cough of asthmatic adults refractory to inhaled corticosteroids (吸入ステロイド薬抵抗性の成人の喘息性咳嗽に対するチオトロピウムの有用性)」という演題で発表する機会を与えられました。このような専門性の高い国際学会で、当研究室の成果を発表するという貴重な経験をさせていただいただけではなく、微力ではございますが、名古屋市立大学の国際認知度の向上に貢献できたものと考えております。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ◆第 1 次 No.13


【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	相羽 久輝
【学会の名称】	The 11 <sup>th</sup> Meeting of The Asia Pacific Musculoskeletal Tumour Society 第 11 回 アジア太平洋骨軟部腫瘍会議
【研究発表報告】	<p>当院において骨軟部腫瘍に対して行われている温熱療法の良い成績について、国際会議で発表すること出来非常に嬉しく思っております。少しでも多くの方に私たちの治療について興味を持っていただければと思います。</p> 

## ◆第 1 次 No.14


【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	安間 三四郎
【学会の名称】	17th ESSKA (The European Society of Sports Traumatology, Knee Surgery and Arthroscopy) Congress
【研究発表報告】	<p>Oral 発表に与えられた 7 分間のために必要とされる準備がいかに多く大変なものかを痛感するとともに今後、そのような機会を再び与えられるようさらに努力していきたいと思った。</p>  

# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ◆第 1 次 No.15

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	海野 怜
【学会の名称】	American Urological Association Annual Meeting 2016 (アメリカ泌尿器科学会総会 2016)
【研究発表報告】	<p>今回は発表も含め経験は、今後の基礎研究をする上で様々な知識を得ることができ非常に充実したものとなりました。</p> <p>研究をご指導いただいた様々な先生方に感謝するとともに、今後研究を含めより一層精進していきたいと思えます。</p>
	

## ◆第 1 次 No.16

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	Mohammed Hassan Mohammed Inbraheim Gaballah
【学会の名称】	2016 IALM Intersocietal Symposium
【研究発表報告】	<p>6 月 21～24 日にイタリアのベニスで開催された 2016 IALM International Symposium (2016 年国際法医学会シンポジウム)に参加し、Time course analysis of five cytokines of incised wound in skeletal muscle for wound aging と題する口演発表を行いました。</p>
	



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ◆第 1 次 No.17

【所 属】	薬学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	壁谷 知樹
【学会の名称】	11th International Society for the Study of Xenobiotics Meeting (第 11 回国際薬物動態学会)
【研究発表報告】	<p>私は、2016 年 6 月 12 日～16 日の 5 日間、韓国釜山で開催された第 11 回国際薬物動態学会でポスター発表を行いました。今回の学会のテーマは、「個別化医療の時代における薬物動態」でした。薬物代謝酵素や薬物トランスポーターの多型のことなど、テーマに沿ったシンポジウムを聞くことができました。</p> <p>私にとって初めての国際学会で、目の前で繰り広げられる英語の議論に戸惑うこともありましたが、外国の研究者と研究について議論できたことは大変貴重な経験になりました。しかし、英語が聞き取れなかったことや、伝えたいことが言葉にできない自身の英語力の低さに悔しい想いもしました。この貴重な経験を、今後の研究や自身の英語力向上に活かしていきたいです。</p>
	 

## ◆第 1 次 No.18

【所 属】	芸術工学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	稲垣 友規
【学会の名称】	12TH REHVA WORLD CONGRESS (REHVA 国際大会)
【研究発表報告】	<p>私は、今回デンマークで開催された REHVA WORLD CONGRESS に参加しました。主催している REHVA はヨーロッパにおける空調・換気設備に関する学協会であり、私はクール/ヒートチューブの性能予測と設計手法提案に関する研究という題目で発表をさせて頂きました。学会中に参加したワークショップでは、自身の研究に活用できそうな知識を得ることもでき、非常に意義のある経験をする事ができました。</p>
	

# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.1

【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	松川 泰
【学会の名称】	The 32th Annual Meeting of ESHRE (第 32 回欧州ヒト生殖医学会)
【研究発表報告】	<p>第 32 回欧州ヒト生殖医学会に参加した。ヨーロッパ以外の世界中から多くの人が参加していた。私はポスターセッションで、プロテイン S と不育症に関する研究テーマについて発表した。プロテイン S 欠乏症は日本人において最も頻度が高い先天性血栓性素因であり、本邦における不育症の原因として重要な位置を占める可能性があるとしてされているが、我々は本研究においてその頻度に差は無く、不育症の原因ではないことを明らかにした。不育症の発症機序、治療法に関しては、いまだ確固たるエビデンスが得られていないのが現状である。世界でもいまだに議論の余地がある分野であり、国際学会にて本研究成果を発表し、情報発信することができたと考えている。またそれ以外の不育症、不妊症に関する基礎および臨床の国際的研究について勉強することができた。今後の研究活動に活かしたいと考えている。</p>



## ■第 2 次 No.2

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	打田 佑人
【学会の名称】	International Symposium on Amyloidosis (国際アミロイドーシス学会)
【研究発表報告】	<p>スウェーデンの UPPSALA 大学で行われた国際アミロイドーシス学会に参加し、ポスタープレゼンテーションをさせて頂きました。テーマは ATTR V30M ホモ接合型アミロイドーシス患者の中枢神経症候に関する報告です (Uchida, et al. Amyloid. 2015;22(4):261-2)。各国から参加しているアミロイドーシスのエキスパートから頂いたコメントは、今後の臨床ならびに研究に向けて刺激になりました。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.3

【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	青山 幸平
【学会の名称】	The 55th ESPE Annual Meeting(ESPE: European Society for Paediatric Endocrinology) (第 55 回ヨーロッパ小児内分泌学会)
【研究発表報告】	<p>第 55 回欧州小児内分泌学会(ESPE)がパリで開催され、低ゴナドトロピン性性腺機能低下症に対する網羅的な遺伝子解析の結果と、それぞれの原因遺伝子毎の臨床像の特徴について検討し、報告してきました。自分たちの日頃の研究成果を直接に世界へ発信できる貴重な場であると感じました。</p>



## ■第 2 次 No.4

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	澤田 裕介
【学会の名称】	Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe 2016 (欧州心臓血管・血管内治療学会 2016)
【研究発表報告】	<p>私は 2016 年 9 月 10 日～14 日にかけてスペインのバルセロナにて開催された Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe (CIRSE)2016 に参加してきました。この学会は Interventional Radiology の領域では世界最大級の学会であり、私は、Embolization for renal angiomyolipoma using a micro-balloon catheter and ethanol というタイトルについて発表を行いました。このような学会で、自分自身の研究内容を発表することができたことは、大変意義のある経験となりました。</p> <p>また、様々な地域出身の研究者の方々との議論を通じ、今後の研究に有用な助言や、自分とは異なった視点からの意見を多数頂くことができ、ここで得られた経験を自身の研究に活かしていきたいと思えます。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.5

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	中山 敬太
【学会の名称】	Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe 2016 (欧州心臓血管・血管内治療学会 2016)
【研究発表報告】	<p>平成 28 年 9 月 10 日から 14 日にスペイン、バルセロナにて開催された CIRSE(Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe)に参加させていただき、「Concomitant transarterial and transvenous coil-embolization for a large aneurysmal-type renal arteriovenous fistula (巨大腎動静脈瘻に対して経動静脈コイル塞栓術を施行した一例)」について発表をさせていただきました。初めて、国際学会で発表させていただき、とてもいい経験となりました。また、学会全体を通して IVR 領域における最先端の知見を得ることができました。</p>
	


## ■第 2 次 No.6

【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	橋本 眞吾
【学会の名称】	ASTRO 58th Annual Meeting (第 58 回アメリカ放射線腫瘍学会)
【研究発表報告】	<p>ASTRO 58th Annual Meeting (第 58 回アメリカ放射線腫瘍学会)にて Potentially Lethal Damage Repair and Sublethal Damage Repair after Proton Beam Irradiation: Comparison with X-ray Treatment (陽子線照射後の潜在的致死障害回復および亜致死障害回復の検討 (X 線照射後との比較)) という演題名でポスター発表させていただいた。古典的な放射線生物学的効果である潜在的致死障害回復および亜致死障害回復について X 線と陽子線との違いを報告した。最新の放射線治療の臨床成績についても知ることができ、大変有意義であった。</p>
	

# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.7

【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	小川 靖貴
【学会の名称】	American Society for Radiation Oncology(ASTRO)'S 58TH ANNUAL MEETING (第 58 回米国放射線腫瘍学会)
【研究発表報告】	<p>今回米国ボストンにて開かれた第 58 回米国放射線腫瘍学会に参加させていただき、研究成果について発表させていただきました。また、最新の研究や治療機器など様々な知見を得ることが出来、大変刺激的でした。今後の診療や研究に活かしていきたいと思えます。このような機会を与えていただいた名古屋市立大学国際学会支援に深く感謝いたします。</p>



## ■第 2 次 No.8

【所 属】	医学研究科 博士課程 1 年
【氏 名】	中 嵩 晃一郎
【学会の名称】	ASTRO's (American Society for Radiation Oncology) 58th Annual Meeting (米国放射線治療学会年次総会)
【研究発表報告】	<p>この度、ボストンにて行われた米国放射線治療学会にポスター発表というかたちで参加させていただきました。放射線治療分野における世界最大規模の学会であり、とても充実した数日間を過ごすことができました。今回の私の発表は放射線治療と免疫治療を絡めた内容であり、自らの発表内容に関連した報告を中心に、今後の臨床や研究に深く関連のある内容の報告を勉強させていただく良い機会となりました。今後も継続して、世界に発信出来るような研究を行えるよう精進していきたいと思えます。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書


## ■第 2 次 No.9

【所 属】	薬学研究科 博士後期課程 1 年
【氏 名】	吉川 優
【学会の名称】	SAI Computing Conference 2016 (科学情報コンピューティング学会 2016)
【研究発表報告】	<p>マイクロ RNA とは何であり、どう働き、なぜ重要なのかを皮切りに、従来のアルゴリズムでは予測できないマイクロ RNA の特異的な性質を、量子状態を用いてシミュレートする手法について発表した。マイクロ RNA 量子理論を既存のデータベースや報告と結び付けて発展させ、また新たなアルゴリズムを開発し、疾病の診断、さらには予測をコンピュータで行える可能性を示した。そして将来に向けて、実現可能なコンピューターシステムを構築する重要性を発表した。</p>



## ■第 2 次 No.10

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	大曾根 達則
【学会の名称】	SAI Computing Conference 2016 (科学情報コンピューティングカンファレンス 2016)
【研究発表報告】	<p>「microRNA とは何か」というものから始まり、microRNA の量子状態を考慮することで疾患の診断が可能であるという研究結果を発表することで、microRNA を用いることで医療システムにおいてどのような技術革新が期待できるかを報告した。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

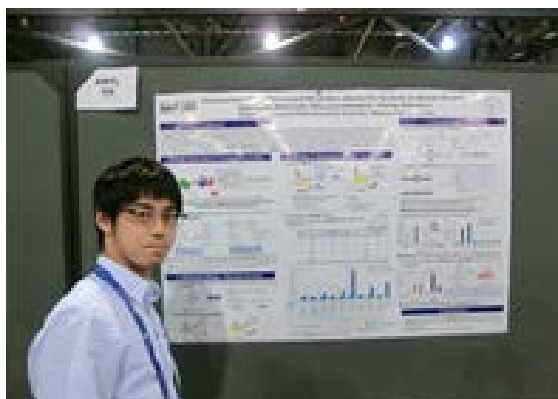
## ■第 2 次 No.11

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	荻野 ひまり
【学会の名称】	Gordon Research Conference, Neurobiology of Brain Disorders (ゴードン会議・脳疾患の神経生物学)
【研究発表報告】	<p>私はスペインで開催された Gordon Research Conference, Neurobiology of Brain Disorders 2016 という、神経変性疾患の学会に参加しました。この学会では、朝から夜まで、食事時間を含めて学会参加者と時間を共にし、非常に濃密な日々を過ごしました。6 日間、休む間もなく自他の研究についての話から、神経変性疾患分野の研究の将来、研究技術、ラボ生活、留学…など、一人ひとりの研究者と互いに向き合い、知り合うことが出来ました。今後も、今回の学会で知り合った方々と連絡を取り合い、良い関係を築いていきたいと思えます。また、この経験を糧にさらなる努力を積み重ね、成長していきたいです。</p>



## ■第 2 次 No.12


【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	犬飼 雄哉
【学会の名称】	252nd ACS National Meeting (第 252 回 アメリカ化学会全国会議)
【研究発表報告】	<p>私は、2016 年 8 月 21 日～25 日にかけてアメリカ・フィラデルフィアで行われた、252nd ACS National Meeting に参加しました。本学会では、アメリカ全土・世界各国から「化学」を中心とした研究者が集まり、口頭発表やポスター発表を行い分野の隔たりなく活発に議論している様子が印象的でした。私は、自分のテーマである一酸化窒素の蛍光検出剤の開発についてポスター発表を行い、日本国内では出会い・議論することの叶わなかった多くの外国の研究者に会い、実際に彼らと議論することができました。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.13

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	奥野 華
【学会の名称】	252nd ACS National Meeting (第 252 回米国化学会全国大会)
【研究発表報告】	<p>今回は米国化学会の全国大会である ACS National Meeting に参加し、光制御型一酸化窒素供与剤の合成および一酸化窒素放出能の評価を報告しました。本学会は化学分野において米国内外で権威ある学会であり、規模が大きく大学だけでなく製薬企業からの参加も多く見られました。海外の研究者と交流できる貴重な機会となりました。名古屋市立大学国際学会支援事業に感謝致します。</p>



## ■第 2 次 No.14

【所 属】	薬学研究科 修士課程 1 年
【氏 名】	丸岡 純也
【学会の名称】	国際神経精神薬理学会 ソウル大会
【研究発表報告】	<p>日本神経精神薬理学会に続いて、国際精神神経薬理学会が開催されるということで、初めて国際学会に参加しました。他分野の研究にふれ、幅広い分野の方々から質問をいただくことで、私自身の考え方の幅が広がりました。研究内容についての発表は、専門性の高い英語が多く、自身の語彙力の少なさを実感し、英語力を高めようと思う良い機会になりました。</p>





# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.15

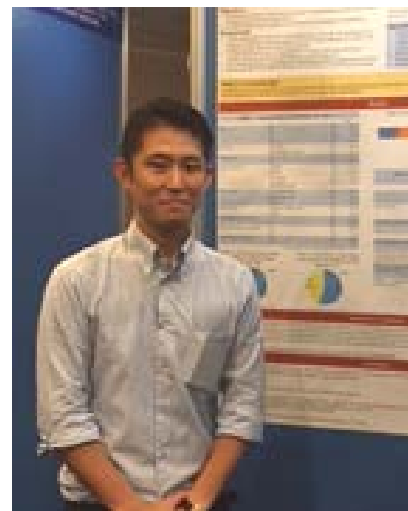
【所 属】 看護学研究科 博士前期課程 2 年

【氏 名】 寺尾 亮平

【学会の名称】Asia-Pacific Conference on Public Health (APCPH) and 1st ASEAN Health Promotion Conference  
(公衆衛生におけるアジア太平洋学術大会・第一回 ASEAN ヘルスプロモーション学術大会)

### 【研究発表報告】

この度、私は 2016 年 8 月に行われた「Asia-Pacific Conference on Public Health (APCPH) and 1st ASEAN Health Promotion Conference」に参加しポスター発表する機会を頂きました。アジア太平洋地域だけではなく、欧米からの参加者の方も多く様々な意見交換をすることができました。今回学んだことを今後の自分のキャリアに生かしていきたいです。このような機会を与えてくださった、国際保健看護学教室の樋口倫代先生・金子典代先生、名古屋市立大学に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。



## ■第 2 次 No.16

【所 属】 システム自然科学研究科 博士前期課程 2 年

【氏 名】 前田 拓見

### 【学会の名称】

XXI Conference on Liquid Crystals (第 21 回液晶会議)

### 【研究発表報告】

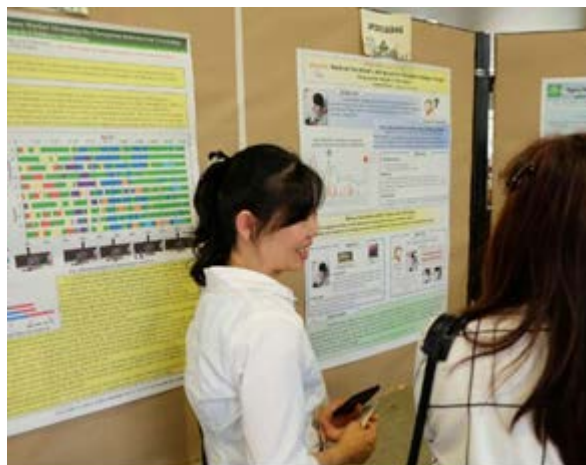
2016 年 9 月 18～23 日にポーランドの保養地 Krynica-Zdrój で開催された Conference on Liquid Crystals に参加し、吐糸速度変化時のクモ糸の分子構造についてポスター発表を行いました。自身の発表を通じて多くの質問や助言を頂き、またそこの英語のやりとりを経る中で自分の語学力を磨くことができました。



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 2 次 No.17

【所 属】	人間文化研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	神谷 良恵
【学会の名称】	PECERA 2016 17th Annual Conference (環太平洋乳幼児教育学会)
【研究発表報告】	<p>私は、2016 年 7 月 7 日～7 月 9 日タイのバンコクで行われた PECERA 2016 17<sup>th</sup> Annual Conference (環太平洋乳幼児教育学会) でポスター発表しました。初めての国際学会発表のため緊張し、英語での意見交流に躊躇しがちでした。それでも他国の方からの率直な質問や意見を通して、自身の研究に重要な刺激をいただくことができたので、今後の研究に役立てたいと思います。その国の文化的背景や考え方が乳幼児の教育に及ぼす影響についても興味を持ち参加しましたが、英語力が不十分であるために満足いく理解ができませんでした。これを機に、英語のスピーチに対応できる理解力と自然な文脈の英会話ができるように、英語力を高め、交流を通して国際的な乳幼児教育の方向性と乳幼児理解を探求したいと思いました。</p>



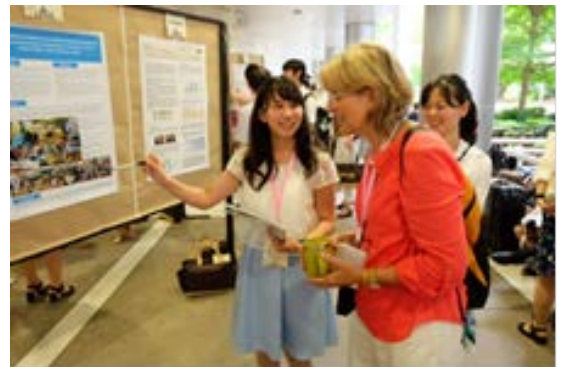
## ■第 2 次 No.18

【所 属】	人間文化研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	上村 晶
【学会の名称】	PECERA 2016 17 <sup>th</sup> Annual Conference (環太平洋乳幼児教育学会)
【研究発表報告】	<p>博士論文関連テーマの一部をポスター発表しました。初めての国際学会発表で大変緊張しましたが、海外の研究者と研究方法・分析視点などで意見を交流することが、大変刺激的でした。特に国際学会だからこそその意見を海外の研究者からいただく中で、国内学会での研究発表とは異なる独自性を打ち出しながら国際発表をしていく重要性を感じました。ただ新規性・独自性を追求するだけでなく、日本の中では得られない示唆を得ることを目標として考え、国際学会で発表する上で何を日本人研究者として発信するかを常に意識することが必要だと感じました。</p>

# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

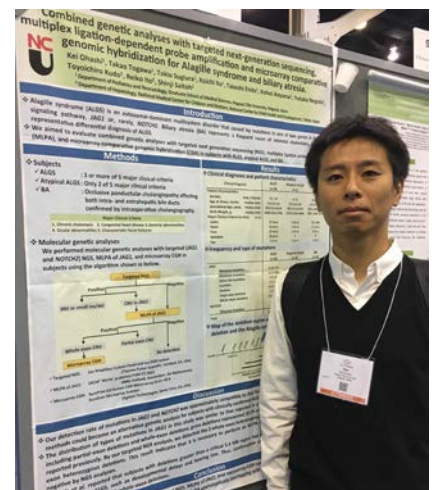
■第 2 次 No.19

【所 属】	人間文化研究科 前期課程 1 年
【氏 名】	萩本 依里奈
【学会の名称】	PECERA (環太平洋乳幼児教育学会)
【研究発表報告】	<p>私は、タイで開催された 17th annual conference of the Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA)に参加し、絵本の読み聞かせにおける間の機能に関するポスター発表を行いました。他国の研究者と、絵本の読み聞かせや間の重要性について議論を交わすことができ、非常に貴重な体験をさせていただきました。今回の発表で得られた助言や励ましを活かし、今後も研究に励んでいこうと思います。また、他国の研究者に自身の研究内容をより明確に伝え、より深い意見交換ができるように、英語力の向上にも努めていきたいと思っています。</p>



◆第 3 次 No.1

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	大橋 圭
【学会の名称】	The American Society of Human Genetics 2016 Annual Meeting (アメリカ人類遺伝学会 2016 年次学術集会)
【研究発表報告】	<p>10 月 18~22 日にバンクーバーで開催された The American Society of Human Genetics 2016 Annual Meeting(ASHG2016)に参加してきました。Alagille 症候群ならびに胆道閉鎖症に対する体系的遺伝学的解析に関するポスター発表を行いました。学会全体を通して各疾患における遺伝学的解析の結果のみならず、生物学的な新しい知見や最新の遺伝学的解析手法が多く扱われている事が印象的でした。高度な内容が多く、自分の専門分野以外では理解が難しい部分も多くありましたが、非常に多くの刺激を受ける事ができました。今後の研究に活かして行ければと思います。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

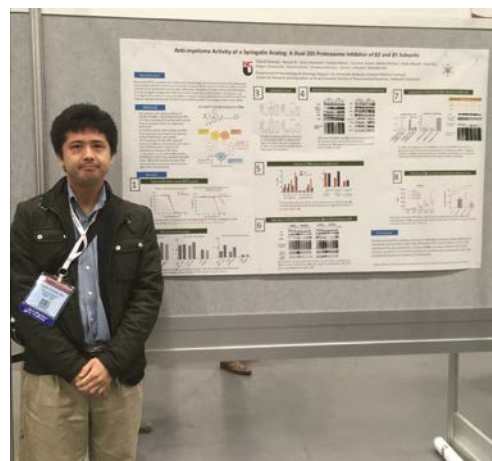
## ◆第 3 次 No.2

【所 属】	医学研究科 博士課程 4 年
【氏 名】	佐藤 豊大
【学会の名称】	Neuroscience 2016 (神経科学 2016)
【研究発表報告】	<p>2016 年 11 月 13 日にサンディエゴで開催された Neuroscience 2016 において、神経内科のオリジナルテーマである Hippocampal Cholinergic Neurostimulating Peptide (HCNP) およびその前駆体タンパク (HCNP-pp) が、コリン作動性刺激を介して海馬のグルタミン酸作動性神経の活動性に依存してシナプス可塑性に影響していること、およびアルツハイマー病 (AD) の原因仮説の一つであるアミロイドオリゴマーによる神経毒性に対して神経機能保護作用を発揮することを発表した。AD の病態との関連が示唆されたことで HCNP/HCNP-pp にこれまで以上の注目を得ることができた。</p>



## ◆第 3 次 No.3


【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	吉田 嵩
【学会の名称】	58th Annual Meeting of the American Society of Hematology (第 58 回アメリカ血液学会年次総会)
【研究発表報告】	<p>アメリカ血液学会に参加し、骨髄腫に関する新たなプロテアソーム阻害薬について、ご指導いただきました先生方や発表支援事業のおかげで、学会発表を行うことができました。意義のある参加ができたと思います。また多くの最先端の血液学の知見に触れることができ、今後の臨床応用の広がりについても興味深く勉強させていただきました。これからも血液学の研鑽を積んでいきたいと思ひます。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

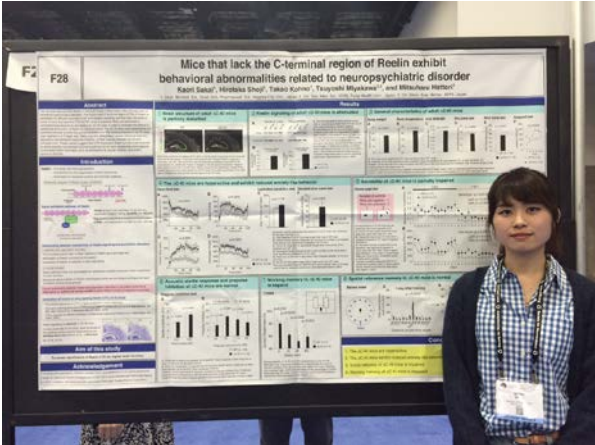
## ◆第 3 次 No.4

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	鈴木 あゆみ
【学会の名称】	17 <sup>th</sup> World Conference on Lung Cancer (第 17 回世界肺癌学会)
【研究発表報告】	<p>今回本制度を利用させていただき、ウィーンで開催された第 17 回世界肺癌学会に参加させていただきました。第一人者の先生方の最新の知見を聞くとともに、多くの若手研究者の発表に刺激を受けました。また、当院からの研究成果が引用された発表もあり、誇らしく思うとともに、諸先輩方に続けるよう今後もますます精進していきたいと感じました。</p>



## ◆第 3 次 No.5

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	酒井 かおり
【学会の名称】	Neuroscience 2016 (北米神経科学学会)
【研究発表報告】	<p>私は 2016 年 11 月 12～16 日にアメリカのサンディエゴで行われた、Neuroscience 2016 において、ポスター発表を行いました。この学会は、世界中の神経科学者が集まる非常に規模の大きな学会です。シンポジウムやポスターなど様々な場面で盛んに意見交換が行われている様子が印象的でした。発表では、様々な研究者の方と研究について英語でディスカッションを行いました。このことは大変貴重な体験であり、勉強になりました。この学会に参加したことで、今後の課題や目標が明らかとなりました。さらに研究や英語の勉強に力を入れていきたいと考えています。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

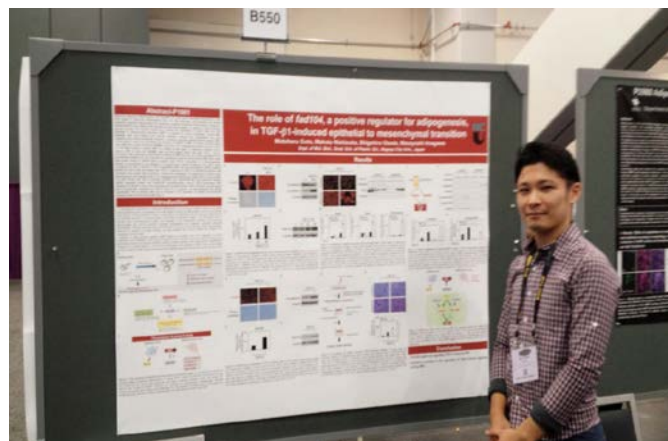
## ◆第 3 次 No.6

【所 属】	薬学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	山影 祐子
【学会の名称】	Neuroscience 2016 (神経科学会 2016)
【研究発表報告】	<p>2016 年 11 月 12～16 日にアメリカ合衆国サンディエゴで行われた Neuroscience 2016 に参加し、ポスター発表を行いました。神経科学に特化した学会であるため、自分と同じくアルツハイマー病を研究する科学者から意見をいただき、活発に議論を交わしました。シンポジウムや他のポスターでも神経変性疾患に関する発表が数多く行われており、最新の研究内容を聞くことで知識を深めるとともに研究意欲が刺激されました。初の海外渡航であったため英語での対話に不安がありましたが、話し方を試行錯誤することで自分の意見を伝えられることが分かり、コミュニケーション能力向上にもつながったと思います。</p>



## ◆第 3 次 No.7

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	後藤 元晴
【学会の名称】	The American Society for Cell Biology Annual Meeting 2016 (アメリカ細胞生物学会年会 2016)
【研究発表報告】	<p>私は 12 月 3 日から 7 日までサンフランシスコで開催された ASCB 2016 annual meeting に参加しました。本学会は細胞生物学の基礎研究の中で世界最大と言われている学会により開催されているだけあり、細胞生物学の非常に幅広い分野の研究者たちが会場のあちこちで熱いディスカッションを交わしていました。多くの研究者の方々と自身の研究テーマおよび分野について議論したことは大変貴重な経験になりました。本学会に参加したことにより、今後の研究により一層励んでいこうとモチベーションを高めることができました。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書


## ◆第 3 次 No.8

【所 属】	システム自然科学研究科 博士後期課程 2 年
【氏 名】	孟 夢
【学会の名称】	The 2016 International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (知的信号処理と通信システムに関する国際シンポジウム)
【研究発表報告】	<p>私は 2016 年 10 月 24 日~27 日にタイ王国のプーケットで開催された国際会議 ISPACS 2016 において、発表を行いました。様々な研究者の方と本研究について英語で話したことは非常に貴重な体験であり、勉強になりました。今回の国際学会に参加したことで、今後の課題が明らかとなったので、更に研究に力を入れています。</p>



## ◆第 3 次 No.9

【所 属】	人間文化研究科 博士後期課程 3 年
【氏 名】	小野 純子
【学会の名称】	第十二届「嘉義研究」國際學術研討會 (第 12 回「嘉義研究」國際學術研究大会)
【研究発表報告】	<p>今回は、台湾国立嘉義大学から素晴らしい機会をいただき、大学主催の国際シンポジウムで口頭発表をしました。本学会の開催地、台湾・嘉義県は自身の研究とも関係が深く、自身の提案する仮説、その実証方法を聴衆に理解してもらい、その意義や重要性を広めることができました。コメンテーターをはじめ、他分野の研究者からも建設的な意見を頂き、大変意義のある研究発表となりました。他言語(中国語)での原稿執筆、発表及び質疑応答は容易ではありませんでしたが、事前準備も含め大変勉強になりました。</p>



# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 4 次 No.1

【所 属】	医学研究科 博士課程 2 年
【氏 名】	島村 泰輝
【学会の名称】	European Congress of Radiology 2017 (欧州放射線学会 2017)
【研究発表報告】	<p>欧州放射線学会 2017 にてポスター発表を行って参りました。国際学会に参加し発表させて頂くことを心より嬉しく、光栄に存じています。新たな技術を伝えられること、そして様々な研究者から新知見を得られる事が出来、大変有意義でした。今後も発表が行えるように日々精進したいです。</p>



## ■第 4 次 No.2


【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 2 年
【氏 名】	山村 英斗
【学会の名称】	AMED-Alberta Workshop for Medical Innovation (創薬イノベーションにおける AMED とアルバータワークショップ)
【研究発表報告】	<p>私は、2017 年 2 月 24 日、25 日にカナダのカルガリー市にある Hyatt Regency Hotel にて行われた「AMED-Alberta Workshop for Medical Innovation」においてポスター発表を行いました。ポスター会場では、癌幹細胞や免疫の研究において最先端を走る海外の先生達が、熱いディスカッションを繰り広げていました。自身の研究発表に関しても、興味を持って訪れて下さった海外の研究者と積極的にディスカッションをすることが出来ました。この海外学会で得られた経験を、自身の研究の更なる発展に生かしてきたいです。</p>





# 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

## ■第 4 次 No.3

【所 属】	薬学研究科 博士前期課程 1 年
【氏 名】	岡本 秀人
【学会の名称】	Society of Toxicology 56 <sup>th</sup> Annual Meeting and ToxExpo (第 56 回国際毒性学会)
【研究発表報告】	<p>私は、アメリカのボルチモアで行われた「Society of Toxicology 56<sup>th</sup> Annual Meeting and ToxExpo」という学会に参加し、自身の研究成果についてポスター発表を行いました。今回、海外で発表できたことは、非常に貴重な経験であり、私の人生において極めてプラスになることだと思います。名古屋市立大学国際学会支援に採用され、貴重な経験をさせて頂いたことを深く感謝致します。</p> 

## ◆第 5 次 No.1

【所 属】	医学研究科 博士課程 3 年
【氏 名】	間瀬 聖子
【学会の名称】	The 3 <sup>rd</sup> Taiwan Epigenomics Symposium and International Conference on Systems Biology (第 3 回台湾エピゲノミクスシンポジウム・システム生物学国際会議)
【研究発表報告】	<p>DNA メチル化、ヒストン修飾、クロマチンリモデリング、非翻訳 RNA などのエピゲノム異常は、発がんからがんの進展などすべての段階に関与しています。本学会では台湾を中心とした各国の研究者が集い、最新のがんエピゲノム研究について、発表、討議を行いました。会場は大学内の講堂で、現地の学生の参加も多く、アットホームな雰囲気でした。</p> <p>今回私は、卵巣がんの早期再発マーカーとなる DNA メチル化遺伝子の同定についてポスター発表を行いました。卵巣がんは高率に再発し、その再発時期が早いほど予後不良です。公共データベースを使用し、DNA メチル化マイクロアレイの結果から、晩期再発卵巣がん群と比較し、早期再発卵巣がん群で有意にメチル化している遺伝子 11 個を同定しました。そのうち ZNF671 は 2 群間で最も差が大きく、かつ DNA メチル化と発現に逆相関がみられました。卵巣がん細胞株において ZNF671 をノックダウンすると、有意に細胞増殖が増加し、浸潤能や遊</p>  <p>The 3<sup>rd</sup> Taiwan Epigenomics Symposium and International Conference on Systems Biology March 17-18, 2017 National Chung Cheng University Chia-Yi Taiwan</p>

## 平成 28 年度 名古屋市立大学国際学会発表成果報告書

走能の増加も認められました。自施設の卵巣がん検体においても、早期再発群で有意に ZNF671 は高メチル化しており、ZNF671 はがん抑制遺伝子としての機能を有し、有効な再発予測マーカーと考えられました。

また、共同研究者である台湾中正大学の Michael Chan 教授と討議し、追加で複数の遺伝子の DNA メチル化を測定することで、再発マーカーとしての感度を上昇させることができると考えられ、今後の研究の大きな方針を立てることができました。

初めての国際学会への参加であり大変緊張しましたが、遺伝子制御学の近藤教授のご指導のおかげで、さまざまな国の研究者と話すことができ、大変有意義でありました。同時に自分の英語でのコミュニケーション能力のなさを痛感し、今後のモチベーション維持の糧とすることができました。

### ◆第 5 次 No.2

【所 属】 薬学研究科 博士前期課程 1 年 ( 創薬生命科学専攻・生命分子構造学 )

【氏 名】 與語 理那

【学会の名称】 Advanced Isotopic Labeling Methods for Integrated Structural Biology 2017  
(構造生物学への先進的な同位体標識法に関する国際学会)

#### 【研究発表報告】

私はフランスのグルノーブルで開催された Advanced Isotopic Labeling Methods for Integrated Structural Biology2017 に参加し、ポスター発表を行いました。本学会はヨーロッパを中心に世界各国から多くの研究者が一堂に会し、安定同位体標識法を応用した最先端の研究発表が行われていました。本学会に参加し、自分の研究成果を世界中の研究者に紹介出来たことは自分にとって大きな自信となり、今後の研究に対する強い意欲へと繋がっています。

